

遙かなる風雪

⑤

実録・柴田音吉洋服店

明治の反骨——「役人の服は作らん」



明治年間、当時としては画期的な椅子、テーブルの職場。名声を聞き伝えて門を叩く職人は多かったが、音吉の目はきびしく、腕の良い職人だけが選りすぐられた。着物姿の職人もチラホラ見える。

ある日、ガラス戸を開けて知合いの男が入ってきた。

大きな、直径1mはある八角火鉢に炭がおこり、アイロンが数丁赤く輝いている。

そのそばの椅子に腰を下ろし、男は火吹竹で一心に炭を吹く若い徒弟にしばし無駄口をきいた。

「アイロンッ」。音吉の迫力ある声がかかり、若い徒弟がスッ飛んで行く。次いであちらからも、こちらからも声がかかる。「ぼうず、アイロンだッ」。

明治の中ごろ、仕事場は20人ほどの職人が手を休めるひまもないほどの忙がしきだった。

男はキセルの灰を落とし、音吉のそばに立った。

「音吉はん、どや、エライさんの服縫うてくれんかね」。

音吉はアイロンの手を休めずに答える。「誰や、それは」男は一息入れ、裁ち台の上のラシャをちよつとつまんでからいった。

「あんたがお役人の服縫わんのは知っとる。しかしこれは別や」新任の、ある官庁の長官の名を男は口にした。

「大将の服縫えば、あの役所全部得意先にしたも同じやうまいこと縫うてんか」。

「勝手いうて悪いが」音吉はやつとアイロンを置き、男の顔を見た。

「誰やろうと、わしは役人の服は作らん」。

音吉は激してはいなかったむしろ落着いて、当り前のことをいうという風だった。その中に、テコでも動かぬものがあると見てとった男は「惜しい話やのになア」首を振り振り帰っていった。

× × ×

くどくどとしたいいわけや説明をしない性分の音吉が、役人の服を作らなかつた起因を、人に語ることはなかつた多感な年令であった明治初期に巻起つた自由民権運動の嵐が、音吉の心に深くしみ通っていたのか、明治中期以後のこれら運動への弾圧が、その反骨精神を高揚させていったのかはわからない。

起因がどうであれ、音吉のあふれ出る進取の活力は、折から国粋主義、保守主義へ傾むきつつあつた官憲の思想とは相いれぬものであつた。

音吉は新しく興つてきた実業家たちと*肌が合つたのである。権力は肌違ひだった。「好かん」のである。胸いっぱい虚飾ない野望を抱き、新しい事業の行手を語る精気に満ちた実業家たちの洋服を、これ又胸を張り、自信に満ちて作つた。あきれるほど、その態度は堂々としていた。

堂々としているといへば、

顔見知りの職人が、見なれぬ裁ち方、縫い方をするのにすぐ目をとめた。

上りこんで「教えてくれ」という。気取らず、知つたかぶりせず、堂々と好奇に満ちた目で聞く、そんな音吉に敵する者がいる筈はなかつた

× × ×

音吉は腕の良い職人を見抜く眼力のようなものを、生来持っていたらしい。

修業時代の顔見知りのなかから、そんな名人気質の職人たちを店に入れた。「お前、ウチに来いよ」。来ると決めてかかつて、少しも疑わなかつた

それで人がついてくるといったふしぎなところがあつた。

店の名声が出てくるに従つて、門を叩く職人たちも多くなつた。包丁1本ならぬハサミ1丁サラシに巻いて、である。音吉はその中から「見込みのある」者だけを独特のカンで選りすぐり、次第に増えてきた注文をさばいていった

× × ×

そんなころ、大阪の取引先で、音吉は頬をふくらまして火吹竹を吹いているひとりの*ぼうず。に目をとめた。

いま「桜橋」の業界元老として知られる田中治三郎さん(87才)の71年前の姿だった。(つづく)

岡 和子記者